

山崎豊子「大地の子」と严歌苓《小姨多鹤》の比較 ——「逃避行」における女性の描写を中心に——

邱敬雯

A comparative study of *The Son of Earth* and *Auntie Duohe*(*Tazuru*) - Focusing on women's depiction in "Escape"-

QIU JINGWEN

Abstract

This paper describes a comparative study of *The Son of Earth*, a novel by Toyoko Yamasaki and *Auntie Duohe* (*Tazuru*), a novel by Yan Geling. And Focusing on women's depiction in "Escape". Even though the same topic was used in these two novels, the method of novelization was different. *The Son of Earth* by Toyoko Yamasaki describes the evidence about the "Escape". On the other hand, *Auntie Duohe* (*Tazuru*) by Yan Geling is focusing the episode of Duohe. In the two novels, the Japanese-style lifestyle of Japanese women were described as the traditional image of women who were obedient and obeyed by the male rights society. In addition, the general characteristics of the figure that the women were "motherhood" were also expressed. On the other hand, *Auntie Duohe* (*Tazuru*) by Yan Geling add the characteristics of Duohe's characteristics as a Japanese. Yan emphasized the stereotyped Japanese image of a character.



はじめに

第二次世界大戦に日本が敗戦する直前、「満蒙開拓団」として中国東北地方にきた日本人たちの多くは帰国するために、長く辛い旅を始めざるをえなかった。本稿では、その旅を「逃避行」として呼ぶ。この「逃避行」について日本人が描いた日本文学作品は少ない。例えば、遠藤誉『卡子（チャーズ）出口なき大地』（1984年、読売新聞社）等がある。しかし、一方で、中国作家が書いた中国人側からの「逃避行」への目線の主題化された作品は稀である。そのような文学史的な状況のなかで、本稿では山崎豊子『大地の子』（『文藝春秋』1991年、文春文庫版、1994年）と严歌苓《小姨多鹤》（多鹤おばさん）（作家出版社、2008年）を取り上げ、「逃避行」における当時中国東北地方にいる日本人女性のイメージを絞り、日中両国の作品における人物描写を比較し分析しようとする。

山崎豊子の「大地の子」は、中国に残留した日本人である「陸一心」の半生を描く長編小説である。1987年5月号から1988年3月号まで雑誌『文藝春秋』に連載された。1991年に文藝春秋社から単行本全3巻が刊行され、1994年に文春文庫で全4巻で再刊された。NHKの放送70周年記念番組として日中の共同制作によりテレビドラマ化され、1995年11月11日から12月23日まで放送された。視聴率の高い人気ドラマであった。

一方、同じ中国に残留した日本人の題材を扱う長編小説である严歌苓の《小姨多鹤》は2008年3月に『人民文学』に掲載された。これは、戦後の混乱の中で中国に残された日本人女性多鶴の半生を描いた小説である。同年4月作家出版社から単行本が刊行され、当代長編小説最優秀賞など数々の文学賞を受賞した。中国では2009年に連続テレビドラマとなり、大連の放送局をはじめ全国各地の放送局で放映されると人気を博した。このような「大地の子」と《小姨多鹤》という二つの作品は、どちらも女性作家による中国に残留した日本人を題材とし、「逃避行」の状況と中国における日本人の生活を描いたという点で共通する主題

を抱えているものである。

本稿の目的は山崎豊子「大地の子」と严歌苓《小姨多鹤》を取り上げ、「逃避行」における当時中国東北地方における日本人女性のイメージに絞り、日中両国の作品における人物描写を比較し分析することである。主要な先行研究としては、単援朝「日中女性作家が描いた中国残留孤児像——山崎豊子「大地の子」と严歌苓「小姨多鹤」を読む」のなかでこの二つの小説の創作背景と主人公の人物像について詳しく論じている。しかし、女性像をめぐる分析がまだ不十分であるというのが論者の判断である。そこで、本稿では、時代背景や主題に共通点の多い二つの作品の中の「逃避行」における日本人女性の表象を中心に比較検討した上で、作家は彼女たちにどのような人物像を与えたのか、あるいは、中国人作家と日本人作家という国籍の違いによる描写には相違点はあるかといった観点を中心に、二人の作家の作品化の方法の差異や描かれた人物像に各作家の立場や認識を考察したい。

本論文筆者は博士論文の完成に向けて主に戦争・植民地の時期からそのあとの時期までの女性作家の作品と言葉を研究していきたいので、この二つの作品を選んだ。今後はこの二人の作家の他の関連作品を増やして行くことで、再度この二つの小説に戻ることが必要である。

これまでに論者は主に第二次世界大戦において日本によって中国東北部が「満洲」として植民地化された時期から、戦後の時期までを中心に描いた中国人の女性作家の作品と言説を研究してきた。中国東北の日本敗戦後の異民族としての人間が戦争期も戦争後も生きていく作品はたくさんあるが、今まだ力が及ばなくて、この二つしか検討ができないので、ひとまず、本論文ではこの二つの作品に絞って論ずる。また、他の作家の旧「満洲」関連の作品へも今後、分析の範囲を広げ、本論文のテーマを総合的に延長する研究の第一歩とする。

1 山崎豊子と严歌苓

作品の比較に入る前に、まずはそれぞれの作家の経歴について整理したい。

山崎豊子は、1924年、大阪市に生まれる。1944年京都女子専門学校（現在の京都女子大学）国文科を卒業した後、毎日新聞大阪本社に入社し、記者として井上靖の下に勤務した。井上靖の影響と励みを受けながら、仕事のかたわら小説を書き始めた。1957年生家の昆布商を題材にした処女長編「暖簾」を刊行し作家としてデビューした。1958年「花のれん」で第39回直木賞を受賞した。初期の作品は概ね船場など大阪の風俗に密着したものであるが、だんだん視野を広げ、大学病院の現実を描く「白い巨塔」（1965年）、金融界を舞台にした「華麗なる一族」（1973年）などを発表した。その後、テーマ設定を大阪から離れ、戦争の非人間性を描く「不毛地帯」（1976年）、「二つの国」（1987年）、「大地の子」（1991年）という「戦争三部作」を創作した。山崎豊子を書いたこの一連の作品はいずれも実際の事件や実在する人物などをモデルにし、社会性と歴史性に富んでいることが大きな特徴である。自分の創作について、山崎自身は「執筆態度は、半年勉強し、半年書くことが、私の一番望むところである³」と語った。このように、新聞記者でもあった山崎豊子の小説は、綿密な調査に基づいて成立しているのだ。

山崎豊子が「戦争三部作」を執筆して戦争の本質に迫ろうとした動機には自身の戦争体験が大きいだろう。大阪府堺市の旧宅で見つかった彼女の日記から見れば、彼女は戦争に恐怖感を持っていたことが伺える。

山崎は「大地の子」を創作する前に、中国の政府側から当時の胡耀邦総書記の協力も得て、長い期間にわたって資料調査をしたという事実は重要である。当時外国人は立ち入り禁止とされている場所でも、特別に山崎は現地の担当者の協力を得て出入りすることができ、取材に行けたのである。山崎は執筆の際に中国での取材にあたり胡の全面的な協力を得たほか、3度も中南海の公邸に招かれた。胡は最初に山崎と会見した

時、「中国を美しく書いてくれなくてもよい。中国の欠点も、暗い影も書いて結構。ただ、それが真実であるならば⁴」と告げた。山崎は1984年6月から中国全土を取材してまわり、その調査は1991年2月までの足かけ8年という長い歳月をかけたものであった。

しかし、なぜ中国に残留した日本人を中心に創作したかったのか。それは山崎の二番目の弟に関係があるかもしれない。山崎の二番目の弟は中国が好きで、中国の文化大革命に遭遇し、ノイローゼになり、それが引き金となって体を悪くして亡くなったのである。彼は病気になってから、葬式はあげず、骨を万里の長城に埋めてくれと言っていた。山崎は万里の長城の城壁のレンガの隙間に弟の遺品を埋めた⁵。したがって、「大地の子」の最後に主人公が中国に残ることを決意した背景には山崎自身の弟との体験に何か関わりがあるとと言えるだろう。

次に、严歌苓の経歴について説明したい。严歌苓は、中国系アメリカ人の中国を代表する現代作家である。中国語の他に、英語でも著作を発表するバイリンガル作家である。1958年、中国上海に生まれる。12歳の時に中国人民解放軍に参加し、以来十三年間、文芸工作団で舞踊団員を務め、四川省、チベットを始め、中国各地を公演して回る⁶。1980年、映画文学《心弦》で作家としてデビューした。（映画文学とは主に脚本のことを指している。映画の中のセリフ、歌詞等も執筆には含まれている。）1986年中国作家協会に加入し、その年、最初の長篇小説《绿血》を発表した。20歳の時に中越戦争にて戦地記者を務める。88年にアメリカへ行く。そして、コロンビア・カレッジ・シカゴにて修士学位を取得する⁷。彼女の作品に映像的な表現の要素が強く、映画化・テレビドラマ化された作品が多いのはアメリカで在学していた時、小説の創作方法について勉強したという背景が考えられるだろう。

严歌苓の代表的な小説は以下の通りである。《扶桑》（1998年）、《白蛇》（2005年）、《天浴》（2008年）、《小姨多鹤》（2008年）、《金陵十三钗》（2013年）などがある。

中国において、严歌苓は以前から非常に注目されて

おり、研究も多い。彼女の小説は主に女性を中心に、そして、自分の「故郷」ではなく、歴史状況を踏まえ、他の地域で生きている「辺縁化女性創作」が少なくない。そして、移民題材の小説、文化大革命時期「上山下乡運動」等の物語が多い。严歌苓は中国光明日報からインタビューされた時は次のように言った「私はただ特別な歴史のストーリーを書きたい、人に特別な変な人間性を見せる、私は、人間性を書くには興味がある。⁸」このような考え方に基づいて严歌苓が創作した小説の主人公は主に女性を中心していることが多いといえる。しかも、彼女が描いた女性たちは少し「鈍い」「単純」「社会底辺」であることが多い。严歌苓はこのような周縁化された女性たちを描くことを通して人間性の特徴、社会の不平等な現象、人生の複雑さや不条理を表している。

严歌苓が《小姨多鹤》を創作したきっかけについて、2014年8月31日、中国の《齐鲁晚报》（『齐鲁晚报』という新聞）では严歌苓は次のようにいった。「『小姨多鹤』は本当のことから改編されたものだ。20年前、私のある友達に私にこのようなことを言った。彼が中学生の時、ある日、クラスに双子が転校してきた。そのあと、この双子の母は日本人だということが分かった。日中戦争が終わった後、双子の母は日本に帰る途中で親戚を失って、地方の匪賊にさらわれて、中国の家に売られた。⁹」というように严歌苓はこの話を聞いた時からその双子の母である日本人女性を小説の主人公に描くことを構想してきた。しかし、この構想を抱いた当時は資料が少なく実際に書くことはできなかったのだ。そのあと、严は中国の東北地方に行き、資料を調べ、三回も日本に行き、実際に終戦前後の混乱期に中国から帰国した日本の婦人と話し合っ、多くの取材や対話を重ねながら、2008年に約2か月でこの小説を書き終えた¹⁰。

ここまで、山崎豊子と严歌苓の二人の作家について紹介してきた。両作家の立場や小説の特質を比べてみると、まず戦争の体験について、山崎は自分自身で戦争の体験がある一方、严歌苓はベトナム戦争の記者の体験しかなかったのであるという違いがある。また、

山崎豊子の主人公は主に男性であることに對して、严歌苓の小説の主人公は主に女性であるという性差がある。小説の題材としても山崎に比べて、严歌苓の作品は主に「移民」と「文化大革命」を主題としているという違いがある。《小姨多鹤》の創作も戦争の記憶より人物の構築を出発点としている。

しかし、二人とも記者経歴があり、綿密な資料や調査に基づく社会系的小説が多く、ベストセラー作家である。そして、人物像の構築と人間性の表現に優れているという点や、どちらも映像化された作品が非常に多く、どちらも自国内では広く万人に受け入れられた代表的な作家だという類似点がある。

2 「大地の子」と《小姨多鹤》

ここからは、本稿で中心的に取り上げる「大地の子」と《小姨多鹤》の物語内容について説明する。

「大地の子」は、1945年8月、ソ満国境に近い日本人開拓村から避難のため佐渡開拓団跡にたどり着いた避難民の一行はソ連軍の攻撃により、ほぼ全滅した。松本勝男（陸一心）、松本敦子（張玉花）という兄妹と同村の小沢咲子の三人は、ソ連軍の射殺から生き残ったが、三人は別々の中国人の家に売られた。養父母に虐待された松本勝男は、やっとその家から逃げ出したが、また悪い人に騙された。悪い人から松本を救ったのは彼の第二の養父となる陸徳志であった。陸徳志の育てにより、松本勝男（陸一心）は日本人の名を棄て「陸一心」として生きる。陸一心は貧しい中からも高等教育を受け、北京鋼鉄会社に配属された。

1966年文化大革命が起きると、日本人であるが故に、日本のスパイと生産破壊罪の容疑を受けて、労働改造（文化大革命時期、中華人民共和国で実施されていた反革命犯及び刑事犯の矯正処遇政策）のために内モンゴルへ送られ、そこで看護婦である江月梅と巡り合った。養父陸徳志の直訴より陸一心の冤罪疑いが晴れ、苦境から脱し、北京に戻ってからは技師になった陸一心は江月梅と結婚し、最新悦の製鉄工場の建設にも重要な役割を果たすようになった。同時に、製鉄工

場の上海事務所長である松本耕次と出会ったが、実は二人は血の繋がった親子であった。お互いに親子であるという実情を知らないまま、二人は仕事について熱い議論を重ねるうちに信頼関係が生まれた。

私生活が充実してきたなかで、陸一心は妹である張玉花を探し出した。長い搜索ののちに再会を果たしたが、彼女は惨めな貧しい日々を過ごしているため、酷い結核性の脊椎炎を病んでしまっていた。張玉花が死んだ日、陸一心は妹の住んでいた村で娘を探しに來た松本耕次と偶然にも出会って、話しているうちにやっと二人は父と子であることがわかった。

その後、陸一心が日本に出張していた間、陸一心の保存していた「工程表」は同室者である馮長幸に盗まれて、スパイの疑いで馮長幸に告発され、陸一心は内モンゴル自治区の大包鋼鉄公司へ転属することになった。約一年後、大学時代の陸一心の恋人で、現在では馮長幸の妻である趙丹青は馮長幸が陸一心を陥れることを計画した証拠を発見し、その書類を持ち、馮長幸の陰謀を暴き、陸一心は無事に上海宝華製鉄工場に戻った。宝華製鉄の完工式が華々しく行われた後、陸一心は実父である松本耕次と船で長江を観光し、父は日本に帰ってきてほしいと申し出された。しかし、そういう実父の願いに、陸一心は「私は、この大地の子です。」と言い、中国に留まって中国人として生き抜くことを選んだ。

以上が山崎豊子「大地の子」の物語内容である。この松本勝男（陸一心）という一人の男を中心とした激動のストーリーを通じ、同時に戦中戦後の日中関係を知ることでもある。小説は戦争の厳しさと戦後の歴史問題としての中国に残留した日本人の一生を紹介している。

次に《小姨多鶴》の物語の内容について説明する。《小姨多鶴》は日中戦争の最終段階で中国東北における日本敗戦を歴史背景に展開されている。日本人の少女多鶴は、敗戦後の黒龍江省の満洲開拓団で、日本軍部に集団自殺を迫られたが、逃げ延びた。しかし、日本に帰る途中で幾つかの襲撃を受け、結局悪い中国人に捕まって「品物」として売られた。そして、中国人

張儉の父に買われた。そして多鶴は妻が子供を産めなくなっている張儉のために子供を産む「道具」としてこの家で生き始めた。

初めの頃には、多鶴は張儉を恨んでおり、張儉も多鶴と子作りのことをするなんて恥ずかしいと思っていた。しかし、多鶴は妊娠した。多鶴は自分が妊娠できたことがわかった時、初めて張儉の一家に自分のことを紹介した。彼女の名前は多鶴であり、家族は全部死んだ。その後、多鶴が産んだ子供は女の子であり、そして「張春美」と呼ばれている。しかし、一家と長く居ればいるほど、多鶴が日本人であると知られる危険性が増す。そのため、張儉の一家は表向きとしては多鶴は朱小環（張儉の妻。妊娠している敗戦前の日本兵士に遭遇してしまい。追われて牛から転んだため、子供を産めなくなった）の妹だと言って、その上、子供たちに母と呼んでももらえず、「小姨」と呼ばれることになった。

その後、多鶴は双子を出産した。三人の「母」になった。ある時、多鶴は張儉と一緒に外で遊びに行った時迷子になった。多鶴は2カ月も家に帰ってこなかった。張儉は多鶴が戻らないと思った。しかし、多鶴は色々を体験し、まるで「死人」のようになって家に戻ってきた。その時、多鶴は初めて自殺を考えた。多鶴は子供を抱きながら張儉を殴っていた。最後、朱小環は多鶴を止めに入った。

新しい中国が建立した後、多鶴が日本人であるという事実は更に危険になってきた。そして、張儉と朱小環は多鶴と子供を連れて南の方に引っ越した。そこで、張儉は新しい仕事を探した。時間が経つとともに、張儉と多鶴の愛情も徐々に深くなっていった。張儉はよく多鶴を連れて遊びに行った。しかし、お金が足りないので、張儉は隠れてお金を借りていた。多鶴はそれがわかった後、朱小環に仕事を探すように言ってほしいと頼んだ。

張儉の友達小彭と小石の二人はよく張儉の家に遊びに来る。そして、小彭と小石は同時に多鶴を気に入った。小彭は本当に多鶴のことが好きになってしまったのだが、別の人との婚約があるので悩んでいた。そし

て、小彭は張儉に多鶴が好きだという話をした。張儉は「もし、彼女と一緒にになりたいなら、婚約破棄して」と言った。すると、小彭は本当に婚約破棄をした。しかし、多鶴は到底小彭と結婚できないので、小彭に自分が日本人であるという事実を明らかにした。このことを知った小彭は悩んでいた。友達である小石は小彭の悩む様子を見て話を聴こうと図った。小石はこの情報を得た後、これを「しっぽ」として多鶴をいじめた。張儉はそれを知った後、工場で「ミス」を作って小石を殺した。結局、この殺人事件がばれ、張儉は監獄に入れられた。多鶴はその時再び自殺したいと思ったが、朱小環はまた頑張って止めた。

同時に、「紅衛兵」(中華人民共和国の文化大革命時代に毛沢東によって動員された全国的な学生運動)になった多鶴の息子張鉄は実の母親が日本人であるという事実を知った後、多鶴だけでなく、張儉と朱小環も両親として認めなくなった。自治体の委員たちは多鶴の身分を調べに来た。なぜなら多鶴は日本人のスパイだと疑っていたからである。調査途中で中国と日本の国交が正常化したので、多鶴の容疑も消えてしまった。

その後、「久美」という日本人女性が多鶴を探しに来た。その子は多鶴が敗戦の動乱の時助けた子である。そして、多鶴は彼女と一緒に日本に戻った。日本に戻った多鶴は生活に適應できない場合が多かった。東京の日本人たちの日本語もよくわからなかった。5年後彼女は中国に張儉と朱小環に会いに帰った。張儉も監獄から解放されていた。しかし、この時の張儉はもうひどい病気にかかっていた。そして、多鶴は張儉と娘張春美と息子張鉄を連れて日本に戻った。張儉は日本の病院で治療を受けたが、効果がなかったため亡くなった。その後、多鶴と娘張春美と息子張鉄と一緒に日本に残った。多鶴はトイレを掃除するなどの仕事をして生きている。時々朱小環に手紙を書く。以上が、《小姨多鶴》の物語内容である。戦争によって大きく左右される一人の女性の半生が描かれている。

《小姨多鶴》の物語の内容から一人の日本人女性が

敗戦後も中国での残留した生活の狀態がわかり、主人公の個人的な考え方、感情等の表現が強調されているのである。

3 日本人の「逃避行」における女性像

二つの小説には、日本が第二次世界大戦の敗戦直前、中国東北地方から日本へ帰る「逃避行」の狀況が描かれている。そして、その時の人々の心理狀態、行動等も細かく表現されている。以下この章からは二つの小説の中のその部分の描写をいくつか取り上げ、主に女性表象に関して比較し、分析する。

3-1 日常生活の女性像

はじめに「逃避行」する直前の中国東北地方の「満蒙開拓団」の村で生活をしている日常生活の日本人女性の女性像に着目したい。以下のいくつかの例を挙げながら、その時の日本女性たちの表象を分析したい。

どの家も、二十歳から四十五までの男子が徴兵されていたから、広大な畑を耕しているのは老人、女子と僅かに残った十七、八歳の青少年たちだった¹⁾。

最后一次満洲招兵，四十五以下の老小伙子们也全走，眼下剩的村民中，绝大多数是女人。女人们把自己家的孩子召唤回家，十五六岁的少年们已经在护村墙的射击口各就各位²⁾。

(論者訳：最後の満洲徴兵では、45歳以下の男子はすべて徴兵された。現在残っている村民は、ほぼ女性である。女性たちは自分の子供を家に呼び集め、15、16歳の少年たちは村の防衛壁の射撃口で戦う準備ができていた。)

この二つの場面は「逃避行」直前の中国東北地方に

おける「満蒙開拓団」の村の状況である。この二つの部分では、当時の女性と10代の少年たちしか残っていないという歴史状況をほぼ正確に表している。1936年5月、広田弘毅内閣によって、農村の過剰人口を当時のソ満国境に近い中国東北部の満洲に送る「20年間100万戸」計画といった満洲開拓を推進する政策が施行された。例えば、「分村移民」といって、村を二つに分け、片方は満洲へ行く、片方は日本に残るという形態をとって、当時貧しかった村社会の再編を図った。また他にも、「満蒙開拓青少年義勇軍」といって、14-15歳の少年たちを満洲へ送るという政策がある。満洲移民は、日本の疲弊した農村の復興制作という意味合いの下、「土の兵士、開け満洲の新天地」というスローガンを掲げたが、実はそれは銃なき侵略戦争に他ならなかった。そのように満洲開拓とは農地の開拓と同義であったため、当時の「逃避行」する直前には、女性だけで家族や村の農業を守らなければならないという背景にはこのような当時の日本政府の政策を把握しておく必要がある。

言い換えれば、この二つの小説によって「逃避行」する直前の女性の生活概況が政策によって影響されていることが極めて具体的に現在の読者にもわかるようになった。当時中国東北地方にいる日本人女性たちは主にすべての家事と子供も面倒を見ているようである。それは、物語の背景だけではなく、実際に当時の日本による「旧満洲の政策」も読み取れる。「満蒙開拓団」は日本本土の農村の過剰な人口問題を解決するための一つの方法である。そして、上記の《小姨多鶴》からの引用部では「満蒙開拓団」の男性は土の開墾以外に、対戦の時にも義勇軍として戦力にもなれる事実も表されている。

次に、《小姨多鶴》における日本人女性の表象について分析したい。

村子里处处是女人们急促的木屐声。她们佝偻着腰蜷着腿跑的飞快，边跑边叫喊：“中国人来了！”¹³

（論者訳：村の中に女性たちの慌ただしい

下駄の音が溢れている。彼女たちが腰を曲げて足を走らせ速く動きながら大声で叫んだ、「中国人が来た！」）

福旦把多鶴送到家时，多鶴睡着了。她的母亲请福旦把多鶴放在门内的地板上，轻手轻脚地鞠躬，轻声地道了十多声谢谢¹⁴。

（論者訳：福旦は多鶴を家に送っていった時、多鶴はもう寝てしまった。多鶴の母は福旦に多鶴を屋内の床にひとまず床に置いてくださいと言った。そして、丁寧にお辞儀をして、小さな声で何回もお礼を言った。）

この二つの描写は《小姨多鶴》の冒頭の部分で、特に注目したいのは、中国人の作家による日本人女性のイメージについての描写である。中国東北地方における「下駄」や「お辞儀」などの日本人たちの姿が提示されているのである。上の文のように、ここでは、中国人作家である严歌苓は日本人の女性の特徴を表し、日本人のイメージを作ったといえるのである。中国においても、日本人たちは開拓団で日本人らしい生活をしている。下駄を履いたのはもちろん、日本人の特徴的な振る舞いの「お辞儀」という習慣も描いている。ここでは、語り手が意図的に私たちに日本人という概念やイメージを強調しているのではないか。その影響で、中国人の読者が小説を読む時に日本人の人物像を作りやすくなり、小説の後の部分で多鶴の経歴についての同情も呼び起こされる。つまり、ここで私たちが見ているのは多鶴以外の日本人の姿だが、しかし、中国人作家から見た典型的な日本人というイメージの強調によって同時に多鶴の人物も造形しているのである。しかも、はじめの引用部では严歌苓は同じく下駄とお辞儀の例を使っていた。それは「逃避行」以外の部分では多鶴が日本人らしい描写の時に使った例と全く同じだ。そこで、作家が自分の思いこんでいる典型的な日本人のイメージを利用して小説を創作することが《小姨多鶴》の特徴であることが明らかに言えるだ

ろう。

その一方で比較として非常に興味深いことは、山崎豊子「大地の子」の「逃避行」の描写では日本人女性には下駄を履くことが一回もないことである。そして、日本人が何十回もお礼を言う描写もなかったのである。二人の作家が日本人女性のイメージを表現した時の違いは重要な点だと思われる。严歌苓は日本人女性を描く時に中国人が思い込んでいる典型的な日本人女性のイメージを強調している。一方、日本人としての山崎豊子は典型的な日本人女性のイメージについて特別に意識して描かなかったことがわかった。中国人女性作家が日本人女性の表象を強調したいために、伝統的な、民族的な要素を使い、日本人の特徴を強調する一方、日本人女性作家はその点にこだわらなかったことがわかった。ここまで、両作家が同じように戦後の混乱期の状況を描きながら、二人の作家が民族的特徴の表現に対しては着目点や表現が違うことが、女性表象の比較を通して明らかになった。

3-2 「男権社会」における女性像

ここまで、両作品における女性表象の違いについて述べたが、ここからは共通点について分析し、考察したい。

母は半狂乱で名を呼び、「みつ子！父ちゃんにすまない、すまない」と自分を責めた¹⁵。

初めの「大地の子」の描写は「逃避行」の中で子供に死なれた母が言った言葉である。ここでは自分の子供の名を叫び、そして、父に「すまない」という事はその女性の考えでは子供がなくなったことは最も父に対して責任を感じているという事である。つまり、この描写は子供の死に対し、子供自身と母親自身より、この家で最も地位が高い父に損失が大きいという「男権社会」におけるヒエラルキーが示されている。

她活着的每一天都没想过拧着丈夫的意愿¹⁶。

(論者訳：彼女は生活する毎日で、夫を裏切するような考えを思いついたこともなかった。)

有的女人哭了：我要等我的丈夫从前线回来啊。村长的声音突然一改，变得凶恶，阴毒¹⁷。

(論者訳：ある女性は泣いた「私は夫が戦場から戻ることを待っているから今は死ねない。」村長の声が突然変わった。凶悪で、厳しくなった。)

そして、上記の《小姨多鹤》の二つの引用部分も、家の中の男が中心的な地位を持っている事ことを表している。そのため、二つの小説とも作家が小説で描いた女性人物像はその封建の時代で、男権社会のもとで支配されている女性像である事がわかった。男権社会の思想が根深くて揺るがない通念であるため、女性たちはいつまでも自分の夫に従うことを強いられている。引用部分のように、自分の夫を待っている死にたくなかった女性と村の男性の命令に従い、死なざるを得ない女性がいる。彼女たちを取り巻く状況は旧時代の思想を十分明らかに表している。次に、更にそのように「男権社会」のなかで抑圧された女性たちが直面する悲惨な出来事について触れていく。

「五歳以下の子供は殺せ！それが全滅から助かる唯一の道だ」と命令した。逃避行に疲れ果て、前途を悲観した若い母親たちは、自分の手で殺すのにしのびず。顔をそむけて、兵隊に幼児や赤ん坊を手渡した¹⁸。

就在这时，她朝怀里哭喊的孩子俯下身，旁边的人只看见她两个刀背似的肩胛骨奇怪地耸立了一会儿。等她直起身，那孩子就一声不吭了¹⁹。

(論者訳：この時、彼女は懷の中の子供

に向かって、うつむいた。隣の人はずただ、彼女のナイフの峰のような二つの肩甲骨がしばらく奇妙に浮き出たのを見た。彼女がからだを起こした時には、もはや子供は一言も発さなかった。)

両方の引用部では読者に母親が自分の子を殺す場面を細かく描いて提示されている。二人の作家が描いたのは未来に絶望した母親の姿である。「大地の子」の引用部分では母親が兵隊に命令を受け、自分の手で殺せないが、子供の命を他人に渡したことからすでに間接的に子供の命を放棄せざるをえない状況が描かれていることがわかった。《小嬢多鶴》の描写では母親が自分の手で子供を殺す場面を描いていた。しかし、ここでは両作家とも、決して日本人の母親が残酷という意味で書いているわけではない。なぜなら、その戦争の時代、その日本人の婦人たちが逃避しているからだ。彼女たちは既に自分の子供たちを守れなくなった。かわいがっている子供に食べ物を渡すことさえも保証できなかった。母親の心の中ではどんなに悲しいことだろうか。そして、彼女たちの後には、敵軍が迫ってきている。その時、子供が厳しい状況で生きていられるかどうかを心配することより、むしろ子供たちがこの痛みを経験しない方がいいと母親たちは考えているだろう。故に、小説の中では、そのような母親が自分の子供を殺す複雑で繊細な心情が真に迫った場面が誕生したのだ。

この二つの引用部分に描かれる母親が子供も命を放棄せざるを得ない緊迫した状況は、当時の女性の地位の低さも潜在的に含まれて起こってくるものであろう。「逃避行」では、命令を受け、自分の子供の命さえ保護できないということは実際に女性の地位の低さや無力さが表明されている。男性の命令が五歳以下の子供を殺すから、彼女たちは子供を兵士たちに渡した。どんなに本心では自分の子供を守りたくても男性の命令に従わなくてははいけない不条理な面を上記の引用では十分に表している。

日本語を話す将校を連れて、降伏を勧告に来たが、憎悪にいきり立つ団員は、将校たちをおびきいれ、発砲して一人を殺し、逃げ遅れた装甲車を焼き払った後、女子子供も含めて全員、自決してしまった²⁰。

取了金耳环回来的女孩此刻站在十米步开外，她正好听到了“自杀”二字²¹。
(論者訳：金のピアスを持ってきた少女は10メートル以上はなれたところで、ちょうど「自決」という二文字を聞いた。)

この二つの引用部分では集団自決の事が何度か描かれている。

「大地の子」の中には、自決すると同時に「天皇陛下、万歳！」²²というセリフを叫んだ男がいる。严歌苓《小嬢多鶴》の中には、「崎戸村」の村民の「好死」（気骨のある人は気骨を持って死ぬ意味）という場面を描写した。严は物語の中で「崎戸村」の村民の死を描いている。両方の作品では共に日本人が敗戦後集団自決の事を選択肢として持っていることを描いており、そこにはその時の教育政策と日本人の心の中の考え方を表れていた。「大地の子」であろうと《小嬢多鶴》であろうと村民たちは国に戻れないなら、中国で恥を持って生きるより日本人らしく自決するほうがよいという気持ちで死を選んだ事を示している。

しかし、二つの小説が本当に、ここで表したいことは日本人の「死生観」ではなく、当時の帝国日本の愛国教育による天皇への絶対忠誠への違和感であるだろう。

严歌苓はこの小説を創作するために二度にわたって日本の中部地方、そして沖縄に一度行って調査した。彼女は日本の中部地方にいたかつて中国東北地方に残留した婦人たちと話し合った²³。また、この「自決」に関する部分の創作のきっかけの一つには沖縄決戦の「集団自決」に基づいていると考えられる。明治時代からはじまった日本人の愛国教育は、特に1940年代に過激になった。その愛国教育は天皇に絶対を従い、

もし目的が達成できない場合には死をもって国に忠誠を誓うことを証明する点に日本の戦時下の愛国教育の独自性がある。沖縄決戦の時と同じく、自分たちの勝利が見えないことがわかった当時の日本兵たちをはじめ、現地の住民たちは愛国心によって自決させられた。そうした沖縄戦における集団自決はよく小説等で描かれているが、日本が敗戦後の中国の東北地方でも同じ状況であると考えられるから、严は集団自決のことを描いたと思われる。

ここでの集団自決はすべて男性からの指令である。つまり、戦時下の当時、天皇崇拜の裏にある男性優位の考え方は動かすことのできない絶対的な価値観であった。男性が集団自決の決定をするなら、女性は、前に引用した文のように子供を殺すという命令)でも従わなければならない女性の低い人権や従順な像が描かれている。二つの小説の中ではどちらでも愛国教育を受けた日本人に言及しているが、それは男性の命に強制的に女性の人権も加えることも表している。この共通点も女性作家なので無意識的に現れる当時の男性優位のジェンダー構造への違和感の一つではないかと論者自身は考えている。

最後に、そうした日本の家父長的な男権社会のなかにおける女性の「母性」について考察する。

3-3 「母性」がある女性像

これまでは男性のコントロールのもとで生きていた女性の抑圧された姿について論じたが、これからは女性の「母性本能」について論じたい。

母の背で泣き続いていた赤ちゃんがいつの間にか、ぐったりしていた。母は背中からおろし、乳をふくませたが、乳は出ず、見かねた団員が粥汁を水筒から出して飲ませてくれたが、赤ちゃんは口を開かず、ヒクッと小鼻を動かしたかと思うと、息絶えた²⁴。

水米未進の母親们仍是把干得起皱的乳房塞给孩子，塞给吃奶的孩子，也塞给半大的孩子，连那些没了母亲的孩子，他们也只好用自己一对乳房去关照。

(論者訳：米と水さえ食べてこなかった母親たちは敢えて尚自分の乾いた皺が寄った乳房を子供に吸わせ、哺乳期の子供に吸わせ、大きな子供にも吸わせ、自分の母親を失った子供たちにさえ自分の一对の乳房で面倒を見た。)²⁵

引用した二つの部分は「逃避行」における女性が子供に母乳を吸わせる場面である。この二つの場面では注目したい共通する観点は二つある。まずは母乳が出ないということで当時の女性たちの飢えを示していることである。しかし、母乳がないにもかかわらず、子供に母乳を吸わせる場面から見れば、母親の「責任」を最後に尽くす気持ちを感じられる。しかし、それは二人の作家が女性作家であるため、女性の本来的に備わっている「母性」というものを美化するという目的から出発したということだけではなく、当時の女性への教育の面からジェンダー形成の過程を分析する必要があるだろう。「満洲国」が成立した後、日本側の軍・政府や清朝遺臣たちが作りたかったのは「孔子祭礼」と「節孝表彰制度」である。また、国策としての女性運動や学校教育も女性を良妻賢母であるという帝国市民に養成させる目的としていた。そのため、当時の女性はこのような「母」としての行動があることもただの「本能」だけではなく、受けた教育、理念もそうであるため、意識的にも無意識的にも行動した可能性もあるのである。

次に、注目したい点は「母」としての役割は他の子供にも及んでいるという点である。この二つの引用には、「大地の子」の引用では、母乳が出ず、他の団員は粥汁を水筒から出して飲ませた場面がある。《小姨多鹤》の引用の描写には、他の子供に吸わせる場面も描いていた。これも当時女性が受けた教育にも関係があるかもしれない。しかし、更に、物語の全篇から分

析すると、严歌苓の《小姨多鹤》は多鶴が生母なのに、子供たちは彼女のことを「小姨」と呼んでいる。一方、中国人の主人公朱小環を「母」と呼んでいる。そして、朱小環も子供たちの面倒を見ている。「逃避行」における日本人女性たちも他人の子供に母乳を吸わせる。これは物語のなかの女性の子供を育てる共通点を表していた。「大地の子」では主人公の陸一心はその後中国人の養父母から家庭の愛を受け、教育を受けた。これも他人の子供の面倒を見る面である。従って、二つの小説の冒頭の部分の「逃避行」における、「母性」への描写は実は母性ではなく、物語が扱っている主人公が中国に残留した日本人という存在の手がかりでもある。

当時の教育によるジェンダー観の形成が当時の日本人女性の行動に影響を与えているが、一方で更に、二人の作家は女性作家であるため、特に女性の「母性」についての描写を強調したという根源的な点も否定できないものである。山崎も严歌苓も、母親は自分の母乳がないにもかかわらず、母親としての責任を尽くすために、母乳を吸わせる動作をした。ここで、読者が見ているのは日本人という国籍を超えた、「偉大な」母親たちだ。作家は特に日本人「女性」というイメージを描写しているわけではない。女性作家は〈女性〉の立場で根源的な「母性」を表している。そのため、作家が描いている女性のイメージは当時の教育によるジェンダー観も介入にはいるが、根源的な「女性」の表象は、国や地域や時代を超えて広く、読者に共感と感動を与えるだろう。

以上のように比較してきた二つの小説の中では、「逃避行」における「事件」の描かれ方が共通している。当時中国東北地方における日本人たちは「逃避行」をする前の背景及び「逃避行」において発生した事件のシーンについて共通する部分が少なくない。そして、そうした共通点にはさらに以下の三つの側面から分析できると考える。

まず、一つ目は、二人の女性作家はこの「逃避行」を書く時の、視点が類似していることである。物語の中で、よく描かれたのは女性の人物像である。特に、

どちらの小説も母は子供に乳を吸わせる時の描写は母が子供を生したい切実な気持ちを強調した。他にも、女性が自分の夫や家のことを大事にするという「考え」を持つ日本人女性の姿も描いた点で、当時の女性の立場が明確に示されている。次に、二つ目の側面としては、当時日本が遂行した「天皇陛下への絶対忠誠」の「洗脳」教育の批判である。二つの物語は「逃避行」に集団自決のことを言及し、当時の教育の結果を表し、集団自決への批判も見られる。最後に、三つ目の特徴として、「逃避行」の背景とシーンが似ているという側面がある。逃避行の目的地と主人公たちの村名は違うが、どちらも逃避行の準備として、食料等の準備から逃避行途中でソ連軍に遭い、老人たちは若者のために止まり、食べ物を若者たちにあげ、自分は命を放棄することも描いた。そして、女性たちは幼児に母乳を吸わせ、母親は子供の命を終わらせる場面も両方とも触れていた。「逃避行」の途中で発生した事件には似たような描写は少なくない。同じ女性作家の視点から分析すると、同じの注目点を選んで、物語を描いたことは興味深い。

結論

山崎豊子「大地の子」と严歌苓《小姨多鹤》における女性表象について比較検討してきた本稿ではどちらの小説の中でも、敗戦後の日本人の「逃避行」における女性たちが、国を問わず、普遍的な「母性」を持った女性であることが表現されていたことが明らかになった。

つまり、そうした女性像は当時の「男性」の側による命令に従い、子を育てることに生命を費やし、貞操を守るという当時の理想的な女性像の表れであり、当時の強いジェンダー・バイアスが克明に反映されていることを示すものとして重要な小説である。

今回は日本敗戦後の「逃避行」の描写場面にあくまで限るが、山崎豊子「大地の子」では、主に多くの取材や資料に基づいた歴史的事実を中心に記述されている、と本論文筆者は考える。しかし、严歌苓《小姨

多鶴》は日本人としての特徴を強調するために、「日本」を代表的に表現できるものを恣意的に強調していることがわかった。そのことによって確かに、「逃避行」における日本人のステレオタイプな日本人女性のイメージが強調されたゆえ、逆に小説は歴史小説としての「真実性」は欠けてしまったと論者は考える。

今後は二つの小説における日本人女性の中国に残留

した生活の描写、例えば、《小姨多鶴》の多鶴と「大地の子」にいる日本人の張玉花なども分析の対象にする。そして、本稿では二つの小説の中の日本人表象を中心に論じてきたが、今後は中国人女性像も考察したい。このように、様々な観点から本論文で取り上げた二つの小説の全体像を立体的に比較することはこれからの取り組みたい課題の一つである。

参考文献

1. 山崎豊子『大地の子』文春文庫 1994 年 1 月
2. 山崎豊子『「大地の子」と私』文藝春秋 1999 年 6 月
3. 庄園《女作家嚴歌苓研究》、汕頭大学出版社 2006 年 4 月（女性作家嚴歌苓の研究）
4. 嚴歌苓《小姨多鶴》作家出版社 2008 年 4 月
5. 嚴歌苓《我追求写作的“浓后之淡”》、《中华读书报》2008 年 7 月（私が追究する創作の「濃淡」）
6. 末次玲子『二十世紀中国女性史』、青木書店 2009 年 5 月
7. 山崎豊子『作家の使命 私の戦後』、新潮社 2009 年 10 月
8. 山崎豊子『大阪づくし私の産声』、新潮社 2009 年 11 月
9. 楊曉文「日本と中国における嚴歌苓研究」、名古屋大学大学院国際言語文化研究科、『言語文化論集』第 XXXI 卷第 2 号、2010 年 3 月
10. 楊曉文《嚴歌苓小説〈小姨多鶴〉論》、《華文文学》2012 年第 5 期（嚴歌苓の小説「多鶴おばさん」論）
11. 王晶、王亭亭「山崎豊子が描いた中国東北部の残留孤児——「大地の子」を中心に——」『日本研究』2015 年第 1 期 P86
12. 「日本开拓团真相与《小姨多鶴》背后的故事」大众网 - 齐鲁晚报 2014 年 08 月 31 日 P6
13. 新潮社山崎プロジェクト室編『山崎豊子・スペシャル・ガイドブック』、新潮社 2015 年 7 月
14. 李瑞華「「大地の子」から見た山崎豊子の反戦・平和意識」『東アジア文化研究科院生論集』第 7 卷 2017 年 11 月
15. 単援朝「日中女性作家が描いた中国残留孤児像——山崎豊子「大地の子」と嚴歌苓「小姨多鶴」を読む」『跨境 日本語文学研究』東アジアと同時代日本語文学フォーラム×高麗大学校 GLOBAL 日本研究院（第 6 号、33-38）2018 年 6 月